

主な出展リスト (作品・資料名/分類/年代/ほか)

※ 当コレクション所蔵の資料は原語にない「バヴロワ」と表記。日本の新聞や書籍に関しては、原文の表記を尊重する。

◆書籍

- BK0032-bio 「アンナ・バヴロワ～その生涯と芸術～」ヴィクトル・ダントレ著 / カッセル&カンパニー出版:イギリス / 1932年
BK2924-bio 「アンナ・バヴロワ」E・E・ベルナタス著 / アール・デコ出版:ロシア / 2006年

◆舞踊譜・スコア

- SC0067 「ミハイル・フォーキン振付『瀕死の白鳥』舞踊譜」ミハイル・フォーキン、カミュー・サン＝サーンズ著 / フィッシャー&ブラザー出版:アメリカ / 1925年
SC0013 「バヴロワ・ミュージック・アルバム～有名作品のイラストと共に～」ウォルフオード・ハイドン編 / チャペル出版:イギリス / 1975年
BK0718-tec 「舞踊の手紙」E・A・テリュエ著 / シャーウッド出版:イギリス / 1831年
BK0436-tec 「ステパノフ舞踊譜についての2つの論考」アレクサンダー・ゴルスキー著 / ローランソ・ジョイ・ウイレイズ / コード・スペシャル出版:アメリカ / 1977年
BK1140-tec 「舞踊と動作の記譜法の原理」ルドルフ・ラバン著 / マクドナルド&エヴァンス出版:イギリス / 1956年
BK0432-tec 「劇的舞踊の新しく奇妙な学校」グレゴリオ・ランブランツィ著 / ダンス・ホライゾンス出版:アメリカ / 1972年

◆写真

- PH0653ws アンナ・バヴロワ『瀕死の白鳥』署名入り / エルンスト・シュナイダー撮影 / 1920～1930年代
PH0651 アンナ・バヴロワ 来日 鎌倉の大仏の近くに立つ / 日本 / 1922年
PH0652 アンナ・バヴロワ 自宅「アイヴィー・ハウス」の池のほとりで / エルンスト・シュナイダー撮影 / イギリス / 1922年

◆楽書

- PC0087 ミハイル・フォーキン『薔薇の精』年代不詳(初演:1911年 / 振付:フォーキン)
PC0089 ミハイル・フォーキン『クレオパトラ』年代不詳(初演:1908年 / 振付:フォーキン)
PC0353 ミハイル・フォーキン『フロラの目覚め』年代不詳(初演:1894年 / 振付:マリウス・プティパ)
PC982ws マイヤ・プリセツカヤ『瀕死の白鳥』署名入り / ロシア / 1970年
PC988ws マイヤ・プリセツカヤ『白鳥の湖』署名入り / ロシア / 1970年

◆切手

- ST-BL73-2 マイヤ・プリセツカヤ『瀕死の白鳥』 / タンザニア / 1990年代

◆プログラム

- PRPAV111 アンナ・バヴロワ ハウスプログラム 帝国劇場公演 1922年9月10～29日
PRPAV104 アンナ・バヴロワ ハウスプログラム 来日公演ツアー(名古屋・末広座・大阪・角座・京都・南座・岡山・岡山劇場・広島・壽座・門司・凱旋座・福岡・大博劇場)1922年10月10～27日
PRPAV106 アンナ・バヴロワ ハウスプログラム 大阪・角座公演 1922年10月6～10日
PRPAV107 アンナ・バヴロワ ハウスプログラム 神戸・繁栄館公演 1922年10月14日
PRPAV108 アンナ・バヴロワ ハウスプログラム 京都・南座公演 1922年10月18～20日
PRPAV014 アンナ・バヴロワ 公式プログラム アメリカツアー - 1913～1914年
PRPAV012ws アンナ・バヴロワ 公式プログラム アメリカツアー - 1924年
PRPAV013ws アンナ・バヴロワ 公式プログラム アメリカツアー - 1924年

◆参考映像資料

- *『瀕死の白鳥』アンナ・バヴロワ、マイヤ・プリセツカヤ、H・アール・カオス、他
*映画『アンナ・バヴロワ』エミリー・ロチャヌー監督 / ソ連・イギリス共同制作 / 1984年
*『BS朝日 日本バレエの母を求めて～エリアナ・バヴロワの波乱の生涯と謎～』(BS朝日 2014年6月29日放送)

関連企画

ダンス・パフォーマンス『蘇る白鳥』

「瀕死の白鳥」が、バレエ版・コンテンポラリーダンス版で、蘇ります。
2010年初演、伝説のH・アール・カオス版「瀕死の白鳥」も、特別上演決定!

- *バレエ『瀕死の白鳥』(原振付:ミハイル・フォーキン / 出演:若林絵美 奥野亜衣 ※ダブルキャスト)
- *コンテンポラリーダンス『瀕死の白鳥』(振付・出演:関 典子)
- *H・アール・カオス『瀕死の白鳥』(振付:大島早紀子 / 出演:白河直子)

[日時] 2015年4月28日(火) 開演(予定)13:30 / 16:00
29日(水・祝) 開演(予定)12:30 / 15:00 ※上演時間:約15分 ※全4回公演
[会場] 兵庫県立芸術文化センター 1階 エントランス

Kenji Usui Ballet Collection

“The Dying Swan”
～ around the dance notations ～

2015/3/24 (Tue.)～2015/5/10 (Sun.)

◎企画・監修

関 典子(せき・のりこ/薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)
Noriko Seki (Curator of Kenji Usui Ballet Collection)
舞踊家・振付家・舞踊研究者。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究所准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術賞・神戸市文化奨励賞など受賞。

岡元ひかる(おかもと・ひかる/薄井憲二バレエ・コレクション・アシスタントキュレーター)

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二 バレエ・コレクション 担当

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22 tel: 0798-68-0223 (代表) fax: 0798-68-0212

禁転載・複製・引用



Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 バレエ・コレクション
2015企画展

蘇る白鳥

～『瀕死の白鳥』舞踊譜をめぐって～

2015/3/24 (Tue.)～2015/5/10 (Sun.)

不朽の名作『瀕死の白鳥』。1907年の初演以来、第一次世界大戦やロシア革命、世界恐慌といった荒波のさなかにも、ずっと踊り継がれてきた作品です。最後の力をふりしぼって羽ばたこうとする瀕死の白鳥。それは「死」に向かうようであり、実は、最も凝縮した「生」の輝きに満ちた瞬間でもあるでしょう。そして、その姿は、我が身を踊りに捧げるダンサー像に重なるとともに、苦難の時代を生きる人々の心に強く響き、希望や勇気をもたらしたことでしよう。

当コレクションには、20世紀初頭のロシアの振付家ミハイル・フォーキンが『瀕死の白鳥』をどう踊るべきかを指示した写真と譜面が残っています。本展示では、この貴重な舞踊譜を中心に、様々な書籍・写真・プログラム、さらに、古今東西の映像と共に『瀕死の白鳥』の魅力に迫ります。関連企画としてダンス・パフォーマンスも開催。是非、「蘇る白鳥」の瞬間に、お立ち会いください。

Hyogo Performing Arts Center

～バレエ『瀕死の白鳥』とは～

「瀕死の白鳥」The Dying Swan(英)Le Cygne(仏)Umirayushchy lebed(露原題)
1幕のソロ・バレエ。振付ミハイル・フォーキン(Mikhail Fokine 1880～1942)、音楽
シャルル・カミーユ・サン＝サーンス(Charles Camille Saint-Saëns 1835～1921)。
初演1907年12月22日サンクトペテルブルク貴族会館でのガラ公演。主演アンナ・パ
ヴロワ(Anna Pavlova 1881～1931)。

サン＝サーンスの「動物の謝肉祭」(1886)の1曲に振り付けたこのバレエは、パヴロ
ワのために作られた。痛切な、羽ばたくような動作が、死に瀕した鳥の苦しみを伝えるだけ
でなく、演技が終わるたびに「死んで」しまう短命な芸術を演じるバレリーナの芸術性を
喚起する。この作品を踊るパヴロワの映像は今日も残っており、現在もパヴロワの代名
詞として、語り継がれている。他にアリシア・マルコワ(Alicia Markova 1910～2004)、
ガリーナ・ウラノワ(Galina Ulanova 1910～1998)、マイヤ・プリセツカヤ(Maya
Plisetskaya 1925～)がこの作品を踊って賞賛された。

異色なところでは、男性のみのカンパニー「トロカデロ・デ・モンテカルロ・バレエ団」
(Ballets Trockadero de Monte Carlo 1974～)は悪名高い喜劇的な「脱毛」
ヴァージョンを上演。ベネズエラの振付家ハビエル・デ・フルトス(Javier De Frutos
1963～)は1990年、彼独自のソロを振付・上演している。日本では、2010年に女性だ
けのカンパニー「H・アール・カオス」(H. Art Chaos
1989～)が新版を発表(振付:大島早紀子/出
演:白河直子)。「生の恍惚・命の儚さ」を痛感さ
せる迫真の演技で、好評を博した。



～『瀕死の白鳥』をめぐる、 二人のパヴロワ～



アンナ・パヴロワ
(Anna Pavlova 1881～1931)

20世紀初頭ロシア・バレエの最高峰に君臨するバレリーナであると共に、自らの一団「パヴロワ・バレエ団」を率いて世界中にバレエを広めた伝道師でもある。1899年にロシア帝室バレエ学校を卒業、マリインスキー・バレエ団に入団。1908年より活動の場を海外にも広げ、1913年に同団を退団、自身の一団で世界中を巡演。1909～1911年にはセルゲイ・ディアギレフ率いるバレエ・リュスに参加し、「ジゼル」「アルミードの館」などを踊り喝采を得た。

1907年、フォーキン振付の「瀕死の白鳥」は彼女の代名詞ともなり、パヴロワの死後は20年ほどの間、彼女の名前を汚すまいと、誰も踊る者はなかった(再び「瀕死の白鳥」を踊り、復活させたのは、同じロシアの名バレリーナ、マイヤ・プリセツカヤである)。1931年、南フランスからオランダのハーグへ行く途中で風邪をこじらせ、肺炎を起こしてこの世を去る。亡くなる間際、付き人を呼んで「白鳥の衣装を持ってきて」と囁いたという伝説が残っている。その夜、ハーグでは予定どおりパヴロワ・バレエ団の公演が行われ、「瀕死の白鳥」の番になると、誰もいない舞台上音楽が流れ、スポット・ライトはパヴロワがいつも踊ったとおりの道筋を照らし、客席のすべてが、涙にくれたという。

エリアナ・パヴロワ

(Eliana Pavlova
のちに日本に帰化して
霧島エリ子 1897～1941)



来日ロシア人ダンサー、教師。日本で初めてバレエの弟子を育て「日本バレエの母」と称される。ロシア革命から逃れ、中国経由で1919年来日。神戸や横浜の外国人居留地ゲーテ座などでバレエを上演。1925年、鎌倉の七里ヶ浜にパヴロワ・バレエ・スクールを設立し、その後の日本バレエ界の枢軸たちを輩出した。

エリアナはアンナ・パヴロワの来日前から「瀕死の白鳥」を踊っているが、それは正式に伝承されたものではなく、写真をはじめとするさまざまな資料・情報から推測してエリアナが独自に振り付けたものだとされる。2014年、特別番組「草刈民代 日本バレエの母を求めて～エリアナ・パヴロワの波乱の生涯と謎～」(BS朝日 2014年6月29日放送)がテレビ放映され、草刈民代と薄井憲二の対談の他、当コレクションの資料にもとづく「瀕死の白鳥」の復元が試みられた。



～初来日の衝撃！ 『瀕死の白鳥』の 目撃者たち～



二代目花柳寿輔
(1893～1970 日本舞踊家元)の証言
(読売新聞「読売演芸館530 おどり(七)」より)

「アンナ・パヴロワというバレリーナが日本に来たのは大正十一年の秋でした。(中略)私はパヴロワについてはなんの知識もなく、友だちにすすめられるままに、ただ参考におまじいという気持ちで帝劇へ行ったのです。

パヴロワは「瀕死の白鳥」というのを踊りました。これはフランスのサン＝サーンスという人の短い曲ですが、彼女のふんした白鳥が次第により果てて、ついには羽をダラリとばして死ぬのですが、その幕切れの迫力は背筋に戦りつが走るほどでした。六代目菊五郎さんは、この「瀕死の白鳥」の死の幕切れの工夫がどうしても見破れず、半てんを借りて大道具さんになりまし、舞台のソデからパヴロワの動作を言っても逃すまいと見守ったそうですが、いよいよ白鳥に死が迫ると、パヴロワは完全に呼吸をとめてしまったそうです。

六代目はその後、パヴロワに「もし、あのまま幕がおりなかつたらどうしますか?」と聞いたところ「幕がおりなければ、その時は私のすばらしい幕切れで、そのまま死んでしまったらと思うことが何度もあります」とパヴロワは答えたそうです。

六代目も「娘道成寺」を踊っていて、無我の境地にはいり、鐘入りのところで、そのまま死にたいと思ったことがある、と述懐されていますが、これは名人にして初めていえる言葉だと思います。」

尚、二代目花柳寿輔は「瀕死の白鳥」を見て感銘を受け、「鶯娘」の羽ばたきの参考にしたという逸話もある。

淀川長治

(1909～1998 映画解説者)の証言

(「私の舞踊家手帖①アンナ・パヴロワ」『ダンスマガジン1995年1月号』新書館 pp.78～81より)



神戸の聚楽館での公演を観た13歳の淀川長治少年は、「瀕死の白鳥」に、ハンカチを「咽喉につくもほど涙を落として泣いた」。また、「一階二階三階すべての席がシーンとなった」と、客席の感動を伝えている。

～「舞踊譜」とは～

「舞踊譜・舞踊記譜法(dance notation)」とは、舞踊を紙の上に記述する方法であり、音楽でいう「楽譜」に相当する。動きを細かく正確に伝えることができるため、作品の保存や著作権を明確にするために利用されている。舞踊譜が完全に包括的なシステムとして確立されたのは、20世紀になってからである。すなわち、それ以前には、多数のバレエ作品は失われてしまいが、部分的な形で記録されるのみであった。「動作の記録には、空間軸と時間軸の両方の記譜が必要である」という事実が、舞踊を紙の上に正確に記録することを困難にしているのだ。

その試みは15世紀後半にまで遡ることができ、最初の洗練されたシステムは、ラウル＝オージェ・フイエ(Raoul-Auger Feuillet 1660頃～1710)が、「コレオグラフィ、あるいは人物、図形、指示記号による舞踊記述技法」(1700)の中で公表したものとされる。20世紀になると、バレエ以外の動作を記録する様式が必要となり、抽象的な記号に基づいて、さらに厳密で完全な記譜が試みられた。今日、実用的価値が高く普及しているものとしては、ハンガリーのダンサー・振付家・舞踊理論家ルドルフ・フォン・ラバン(Rudolf von Laban 1879～1958)が1926年に公表した「ラバノテーション(Labanotation)」、イギリスの夫妻ルドルフ・ベネッシュ(Rudolf Benesh 1916～1975)・ジョーン・ベネッシュ(Joan Benesh 1920～)が1955年に開発した「ベネッシュ・ノーテーション(Benesh notation)」などが挙げられる。

日本においては、東京国立文化財研究所が「標準日本舞踊譜」を刊行している。また、日本独自の表現形態である暗黒舞踏の創始者、土方巽(1928～1986)が残した「舞踏譜」は、「言葉を通してイメージを身体化する」メソッドであり、言葉は、「譜＝ノーテーション」、すなわち記録の道具というよりも、連想を手がかりに身体的なイメージを拡張していくための、一種の触媒として機能した。